

令和四年六月二日(木)

新型コロナウイルス感染状況は好転、
青少年センターでの対面句会を行う。

中村 晃也

峠にてデニムのシャツに百合花粉

杣道は平家の里へ鹿子百合

八つ手若葉揺れて陽光弾きけり

新しき泡の生まれる蝌蚪の池

百合の香や大和尼寺ひっそりと

長尾 進一郎

早苗田の白雲映す上越線

白百合に墓の見守り託しけり

藁葺きの屋根に揺れをり夏の草

初夏や飛沫しづきの光る水車小屋

左右から繋がってゆく虹の橋

浜口 須美子

父の忌よ百合あちら向きこちら向き

大壺にくるりと百合の背きあふ

シヨパン夏光無き人音を生み出す

鞆は行きつ戻りつ今に居る

クローバーの冠そろりと歩く吾子

松田 一文字

雨の中雉もみに翔ぶ燕かな

子に乗せて歩むポニーや子供の日

誰が活けし百合の香や美術室

白帆遠く立夏の海に光満つ

母の待つ兵士の棺百合置かれ

大津 そうかい

天草の城址公園百合の花

この星の光る宇宙よ聖五月

老鶯や吊り橋上に立ち止まり

退社時の別れを惜しむ薄暑かな

父の日や剃り心地よき新シエーバー

高橋 由紀子

新婚の窓に光るや夏入り日

ナイスショット！青葉突き抜け声は飛ぶ

今開かむ説教台の白き百合

掃除機に仔犬じゃれをり夏座敷

うきうきと夏服行き交う新駅舎

志村 良知

山鳩の地唄老鶯谷渡り

梅花藻の花守若し夏の川

真夏日と予報の朝の光かな

母に倣ひ庭隅に在る鹿の子百合

其処此処の紫陽花俄か色付きぬ

首藤 しずを

制服のうなじすつきり野の小百合

旅立ちし人の面影白あぢさゝ

早苗田に月光あふれ村眠る

メランコリいづこも深き緑にて

これはかの光君かと燕子花

宮原 凧

災禍後の句座なごやかに若葉風

絵ガラスの天使のつばさ風光る

文豪の入水の川や草繁る

アイロンの重たき日なり梅雨湿り

夫の忌や届く白百合香を放つ

森田 元斐

全山の霊気を胸に湯帷子

湯の街に和傘を叩く夏の雨

信綱の唱歌を友に卯の花月

夏の風音と光と大神宮

常連を百合の迎える老舗宿

新田 ゆふき

組み上げて放りて思念皐月風

包み解けば空輪の百合や和蘭より

「せんそうやめて」投書幼き若葉雨

人の輪や大道芸の汗光る

雲高く百花抜き出で薔薇香る

安藤 晃二

栗の花匂ひの午後のサティ鳴る
山百合の匂ひの強し絵筆止め
萱草の丘の傾るる佐渡の海
光るビルの空間を切り燕飛ぶ
早や揺るるコーン柏葉紫陽花に

内藤 まりこ

新緑や葉つばにぎざと食みし跡
帰り道夕焼け空の生ぬるき
豹柄の百合と出会へり崖の道
弘前城連休の日の花筏
梅雨空に光の帯の名画かな

西川 知世

夏手套外すピカソの絵の前に
夏に入る戦禍電光掲示板
水貝や齡かさねる軽さかな
手を振って別れ来し夜の百合の花
山ぼふし雨呼ぶ花としてま白

次回は令和四年七月七日（木）、
兼題は中村晃也さん出題の「金魚」、
席題は西川知世さん出題の「灯」
です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

持っている歳時記によると、金魚は鮒が突然変異によって緋鮒という赤い鮒になり、それが和金や琉金になったそう。中国で作られ、文亀二年（一五〇三年）に日本に渡来。その後、出目金、蘭鑄に代表されるいろいろな新品種が作られ、諸外国へ輸出されている。金魚玉、金魚売、金魚釣、金魚店、養殖場など諷詠の対象は多い。傍題は、和金・蘭鑄・琉金・獅子頭などなど。

葛飾区水元の金魚展示場では江戸前金魚の飼育展示があり、育成用のタタキ池が四十面以上並ぶ。三月、十月には月曜を覗き見学できる。ちなみに十一月〜二月は土・日、祝日のみ会場。

しだり尾の錦ぞ動く金魚かな 河東碧梧桐
恋さめて金魚の色もうつろへり 高浜虚子
童話よみ尽して金魚子に吊りぬ 杉田久女
金魚池渾天映りぬたりけり 山口誓子
灯してさざめくごとき金魚かな 飯田蛇笏
ゆふぐれの金魚となりてつばやける 軽部烏頭子
金魚大鱗夕焼の空の如きあり 松本たかし
あるときの我をよぎれる金魚かな 中村汀女
己れ殺す勤めぞ金魚買ひ足して 藤田湘子
子への愛知らず金魚に魅をうかす 桂 信子
注ぐ水金魚の水に棒立てり 橋本美代子